

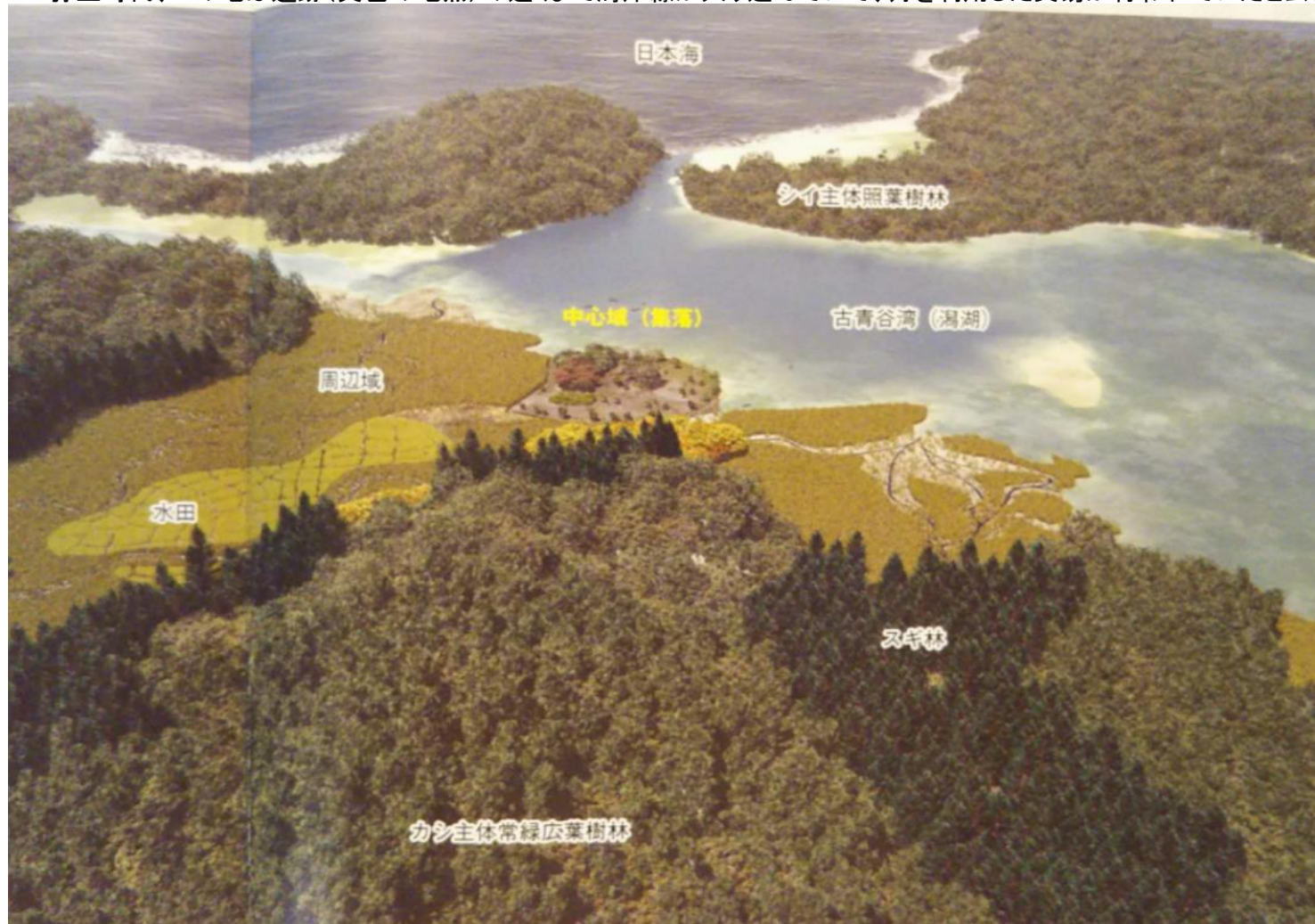
青谷上寺地遺跡(鳥取市青谷町)

あおや かみじち いせき

青谷上寺地遺跡は弥生時代前期末から古墳時代初めの複合遺跡で、弥生前期末～後期を中心とする集落遺跡と想定されている/これは道路の建設に伴って発掘(1次調査)された青谷上寺地遺跡の範囲と青谷上寺地遺跡展示館の位置/上方は日本海



弥生時代、この地は遺跡(黄色の地点)の近くまで海岸線が入り込んでいて、舟を利用した交易が行われていたと云う

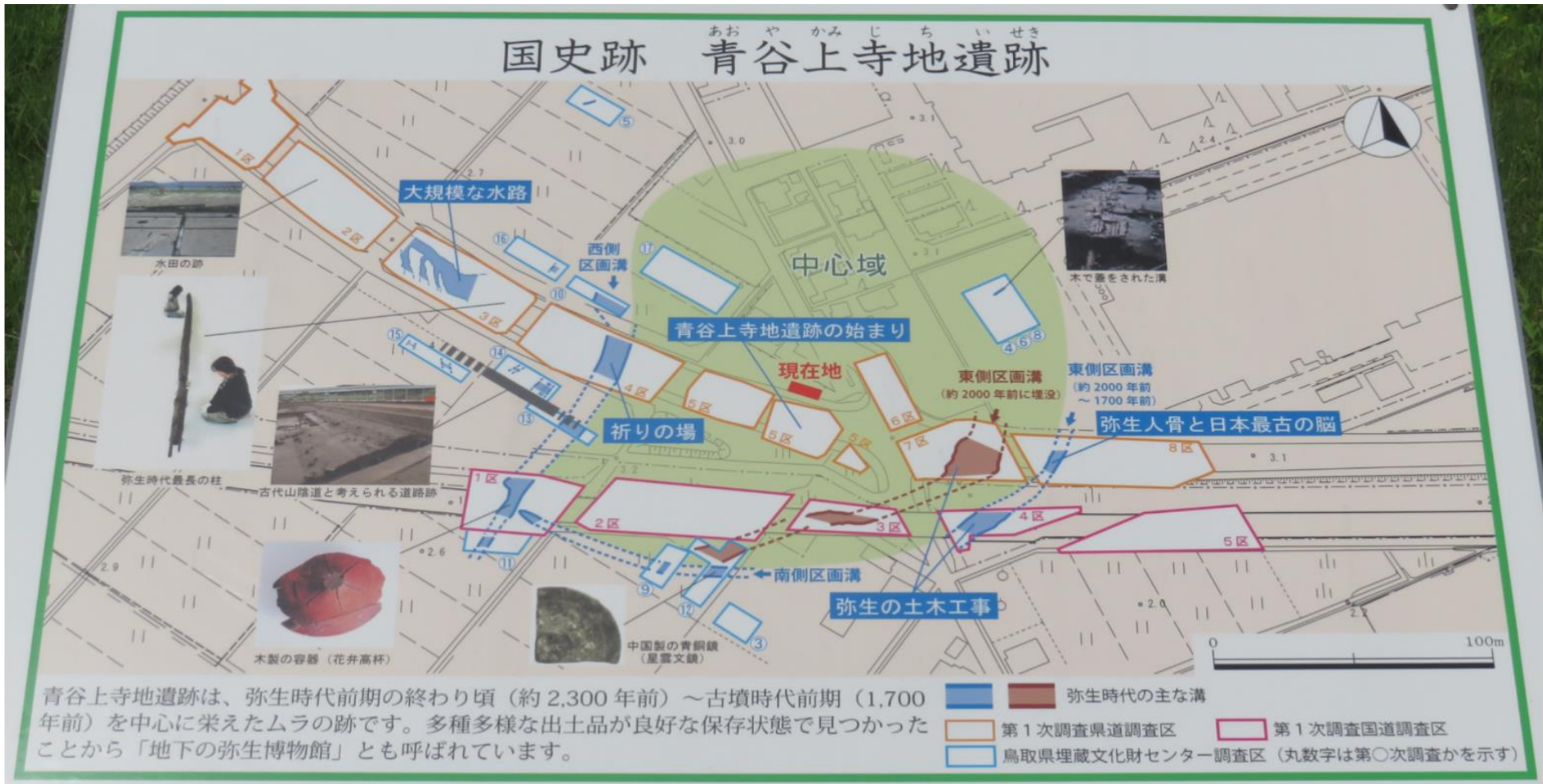


ここが発掘(1次調査)された青谷上寺地遺跡の範囲/説明板が沢山並んで立っている

[\(クリックしてビデオを見る\)](#)



青谷上寺地遺跡は、弥生時代前期の終わり頃(約2300年前)から古墳時代前期(1700年前)にかけて存在した、稲作・漁労を営みながら海を介して交易を行っていた港湾集落と考えられると云う/弥生時代中期後葉(約2000年前)になって、大規模な護岸施設が作られたり、出土品の量も増えることから、この時期に集落の拡大があったと考えられると云う/ただし、住居跡、古代人の墓はまだ発見されていないらしい



あおやかみじらいせき
青谷上寺地遺跡の始まり (弥生時代前期：今から約2200年前)



➡ **貝塚の土層断面** 左の写真の矢印の方向にある断面

青谷上寺地遺跡は、今から約2200年前、弥生時代の前期に始まります。最初に遺跡が出現した場所が上の写真で、色々な形の穴が多数掘られており、またコの字形の溝が2ヶ所みられます。これらの穴や溝が何のために掘られたのかは分かりません。この場所の東側に同じ時期の貝塚が形成されていたので、ゴミ捨て場に近い場所といえます。

貝塚には、大塚のマフキのほか、サザエやイガイ、ハマグリやアサリなどの貝殻が捨てられています。弥生人が何を食べていたのか、知ることができます。

その後、時代が経つにつれて、遺跡の範囲はこの場所よりもさらに広がっていきます。写真の場所は、青谷上寺地遺跡のスタート地点といえるかも知れません。

この場所で見つかったものです。これは何でしょう？
 (答えはこの看板の左下隅。)

(答え：人間などの糞の化石、糞石という。)



この場所で見つかったものです。
 これは何でしょう？
 (答えはこの看板の左下隅。)

この場所で見つかったものです。
 これは何でしょう？
 (答えはこの看板の左下隅。)

交易拠点としての港湾集落



現在の青谷平野（南上空から）



北上空から見た青谷上寺地遺跡中心域復原図



約 1,800 年前（弥生時代の終わり頃）の青谷平野復原図（南上空から見た図）

現在の青谷平野には、日本海とつながる内湾（潟湖）が広がっていました。青谷上寺地遺跡の集落は、内湾に面した広さ 3 ha ほどの微高地（中心域）に築かれていました。その周辺域には湿地が広がっており、水田が作られていました。内湾のほりという港として絶好の場所にあった青谷上寺地遺跡は、列島内外の地域との交易の拠点として栄えました。

祈りの場～祭祀場遺構～ (弥生時代後期：今から約1800年前)



東から見た祭祀場
木材や石で出入口を構築している。
左の写真の矢印の方向から撮影。



いけにえにされたサル
後頭部を壊されている。いけにえにされたイヌの頭の骨もみつかった。



古いに使われたト骨
イノシシの肩甲骨の表面を火のついた棒状のもので焼き、それによって生じたヒビ割れや変色具合をみて、吉凶を占う。

遺構は、弥生時代中期になると列状に矢板を打ち込んだ溝で囲まれ、低地部分と区画されます。この場所住居の内側と外側とを結ぶ出入口と考えられます。溝の大きさは発掘された範囲で18mの長さがあり、幅は9m前後、深さは1.1m前後です。祭祀場遺構と呼ばれています。いけにえと思われるサルやイヌの頭骨、鳥形をあしらった木製品、古いに使われたト骨などが見つかり、悪霊に見立てられた外部から迫り来る災難や疫病から村を守るため、この場所で祈りを捧げていたようです。

この遺構は、弥生時代中期になると列状に矢板を打ち込んだ溝で囲まれ、低地部分と区画されます。この場所住居の内側と外側とを結ぶ出入口と考えられます。溝の大きさは発掘された範囲で18mの長さがあり、幅は9m前後、深さは1.1m前後です。祭祀場遺構と呼ばれています。いけにえと思われるサルやイヌの頭骨、鳥形をあしらった木製品、古いに使われたト骨などが見つかり、悪霊に見立てられた外部から迫り来る災難や疫病から村を守るため、この場所で祈りを捧げていたようです。

弥生の土木工事



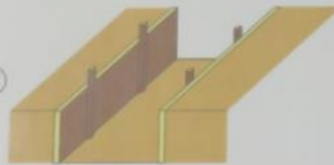
① 矢板を並べた護岸 (上は模式図)



中心域東側の区画溝 (国道4区)



②

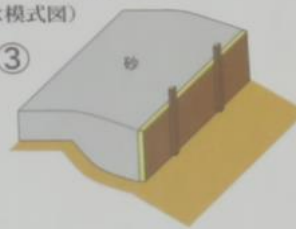


② 横長の板と杭による護岸 (上は模式図)



③ 砂が溝に流れ込むのを防ぐ土留め (県道7区) ▲▶ (下は模式図)

③



弥生時代の弥生人は、集落や水田を洪水などの災害から守るために、大規模な土木工事を行いました。中心域と周辺域とを区画する溝に砂が流れ込むのを防ぐために、先端を尖らせた板、①) や横長の板 (②) を使って護岸工事を行いました。弥生時代中期の終わり頃 (約 2000 年前)、海岸の大量の砂が中心域まで飛んでくるようになると、弥生人は砂が区画溝に流れ込まないように、溝の岸に沿って土留めを造って防ごうとしました (③)。

大規模な水路 (弥生時代後期：今から約1800年前)



遺跡の西側では、水田が営まれていました。写真の中央の溝は、水田に隣接する場所に築かれたもので、護岸施設をもつなど整備されたものであり、水田用の水路であった可能性も考えられます。発掘された範囲では55mの長さがあり、約6mの幅で深さは50cm程度です。護岸施設には、建築材や丸木舟などに使われた多くの木材が再利用されていました。



南東からみた溝

左の写真の矢印の方向から撮影。

弥生時代後期の遺跡で、水田に隣接する水路の遺構が確認された。写真の矢印は、水路の方向を示している。



隣接する弥生時代の水田

白線の幅があげを示す。矢印で示した溝の護岸には、下の写真の丸木舟が転用されていた。

弥生時代後期の遺跡で、水田に隣接する水路の遺構が確認された。写真の矢印は、水路の方向を示している。白線は、水路の幅を示している。矢印で示した溝の護岸には、下の写真の丸木舟が転用されていた。



護岸に転用された丸木舟

丸木舟の舟底に杭が打ち込まれている。写真の左方向が水田

弥生時代後期の遺跡で、水田に隣接する水路の遺構が確認された。写真の矢印は、水路の方向を示している。丸木舟の舟底に杭が打ち込まれている。写真の左方向が水田

弥生人骨と日本最古の脳 (弥生時代後期：今から約1800年前)



弥生人の脳 (前から見たところ)



殺傷痕のある頭蓋骨 (成年、女性)

青谷上寺地遺跡の東端からは、約5200点の人骨が集中して出土しました。これらの人骨は埋葬されたものではなく、無秩序に散らばった状態で発見されました。このうちの3点の頭蓋骨の中に、脳が残っているのが見つかりました。日本最古のものです。

人骨の中には、鋭い刃物などでつけられた切り傷や刺し傷(殺傷痕)のあるものが約130点含まれていました。殺傷痕は男女を問わず認められ、子どもの骨にもみられます。争いに巻き込まれた人々でしょうか。争いの痛ましさを今日に伝えています。



溝から見つかった木製容器



殺傷痕のある背骨

さて、ここが青谷上寺地遺跡展示館



低湿地にある同遺跡は、大気から遮断されて腐敗菌の繁殖が抑えられたことなどから、保存状態の良い遺物が多数出土し「弥生の博物館」と呼ばれている [\(クリックしてビデオを見る\)](#)



ここでの出土品は数万点もあり、特に頭蓋骨の中に一部だけ奇跡的に残っていた古代人の脳は国内でも初の古代人の脳として注目されている/発見された人骨には戦いで傷ついたりとされる傷が多数見つかリ「倭国大乱」を示す可能性もあると云う/他にも海外からもたらされたとされる鉄器などが見つかっている
[\(クリックしてビデオを見る\)](#)

甞る弥生の博物館

青谷上寺地遺跡

青谷上寺地遺跡は鳥取県のほぼ中央の
青谷町にあります。

日本海にほど近い平野部に位置する、弥生時代の集落です。

平成10年度から13年度にかけて発掘調査が行われ、多種多量の出土品が発見されました。

土器や石器だけでなく、時間の経過とともに腐食してしまう金属器、木器、骨角器なども多数出土しました。この中には中国大陸や朝鮮半島とも交流を行っていたことを示すものも多数みられます。

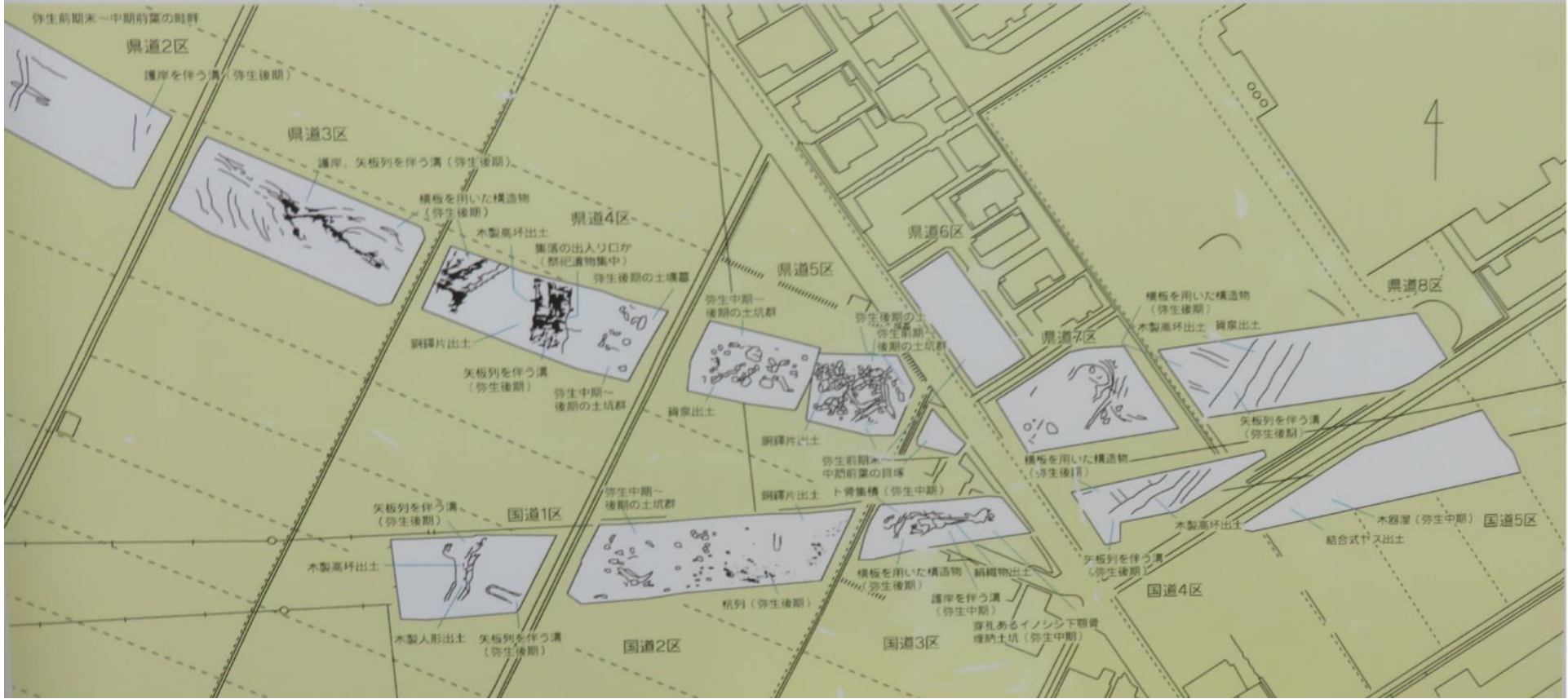
さらに、多くの人骨とともに弥生人の脳が見つかるなど、奇跡的な発見もありました。

このように、青谷上寺地遺跡からは弥生時代に関する多くの情報が得られ、「弥生の博物館」と呼ばれています。



あ お や か み じ ら い せ き

青谷上寺地遺跡 (弥生時代前期～古墳時代前期：今から約2200年～1700年前)



青谷上寺地遺跡をめぐる交流

青谷上寺地遺跡は、さまざまな地域と直接、あるいは間接的に交流をしていたと考えられています。



鳥取県埋蔵文化財センター所蔵データを改変して作成

木材に見る建築技術

加工の技術

斧で切り倒した木材は、クサビを打ち込んで割りました。弥生時代にノコギリはなく、板1枚、角材1本作るのは大変手間のかかることでした。

表面の加工法



「平行切削」繊維の方向に沿って削る。



「斜行切削」繊維の方向に対して斜めに削る。



「割肌」年輪に沿ってはがすように割ったままの状態。

片面を平行切削、もう片面を斜行切削とした板や、綾杉状に削り痕を残す梁などがあり、装飾効果を考えたのかもしれませんが。

建築の技術

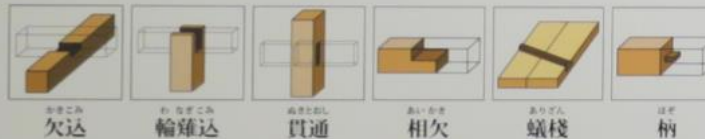
青谷上寺地遺跡から出土した建築材にはさまざまな技法が使われています。

新しい技法が伝わるとともに、鉄製の刃物の普及が精巧で緻密な加工を可能にしたのでしょう。

青谷上寺地遺跡から出土した部材に見られる「継手」「仕口」

「継手」—2つの材を長軸方向に継ぎ足す方法

「仕口」—2つの材を角度をつけて組み合わせる方法



青谷上寺地遺跡から出土した建築部材では、「欠込」「輪葺込」「貫通」「相欠」「蟻棧」「柄」など9種類の継手・仕口が確認されています。

このうち「蟻棧」は日本最古の確認例です。

青谷上寺地

弥生人の生業暦

- 農業
- 採集
- 狩猟
- 漁撈
- その他の労働



対外交易

弥生人の一年間の生活を、春夏秋冬に分けて、青谷上寺地遺跡からは、それぞれの季節の労働に関係が深い遺物が、たくさん見つかりました。各部分には出土したものの名前が書いてあります。アイテムをはめ込んで、青谷上寺地暦を完成させてください。

●遺物の大きさは目安であり、大きさは実際のモノと異なっていてもかまいません。
●遺物の数字は、発掘量の割合を100%とした場合の弥生人の労働量の割合(%)を示しています。



装身具

弥生の海

弥生時代の海は、現在の位置よりもっと内陸にありました。これは、地球全体で気温が高かった縄文時代に、当時の海岸線が今よりも陸地側にあった「縄文海進」という現象の影響です。青谷上寺地の人々は弥生時代前期に住まいをつくりはじめ、最も繁栄が栄えるのは弥生時代後半です。人々は水田をつくらしたり、板などを打ち込んだ溝を掘ったりして、河川の氾濫や水害にそなえました。湿地を上手に活用し、海のそばの遊としても賑わいをみせたことでしょう。



約 6500BP (縄文海進の頃)



約 2100BP (青谷上寺地遺跡 集落隆盛の頃)

青谷平野の古地理変遷

扉をあけてのぞいてみよう！
弥生時代の青谷地域

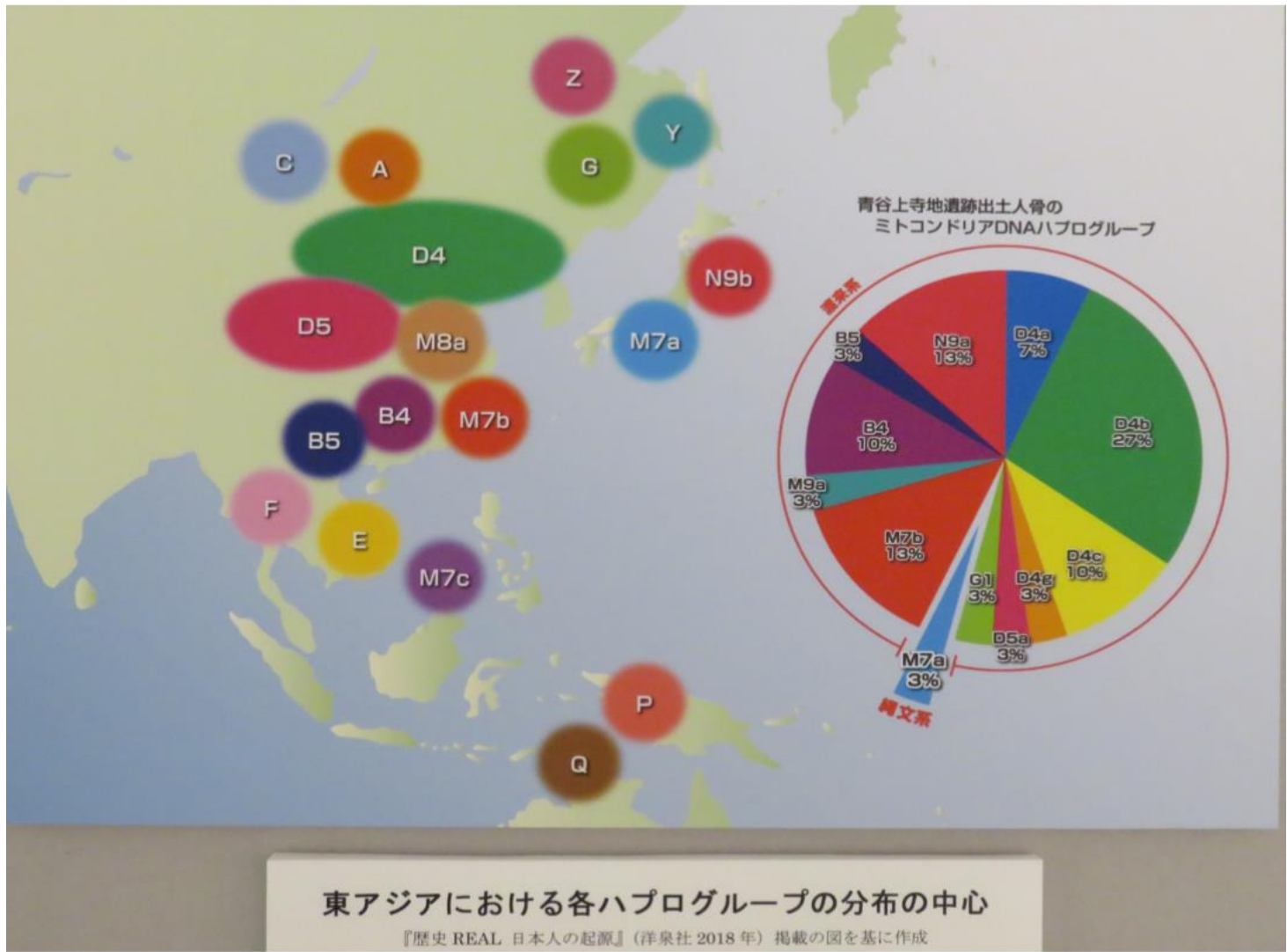


現在の地形(川流地帯平野・高台・丘陵)



縄文海進最盛期の縄文川下流平野(高台・丘陵)

勝部川下流域平野の変遷





速報！あおやかみじち青谷上寺地遺跡出土人骨のDNA分析

青谷上寺地遺跡出土 弥生人骨のDNA分析

青谷上寺地遺跡では、弥生時代後期後半（2世紀頃）に埋まった溝から、約5,300点に及ぶ人骨が出土しています。現在、鳥取県埋蔵文化財センターでは、国立科学博物館、国立歴史民俗博物館と共同して「青谷上寺地遺跡出土人骨のDNA分析」に取り組んでおり、約40個体の頭蓋骨から得たミトコンドリアDNAを解析中です。

母から子へと伝わるミトコンドリアDNAとハプロタイプ

生物の細胞には、ミトコンドリアと核に遺伝情報を伝えるDNA（デオキシリボ核酸）が存在しています。DNAは糖とリン酸、そしてアデニン、グアニン、チミン、シトシンという4種の塩基（有機化合物の一種）で構成される物質です。ミトコンドリアDNAには約1万6500個の塩基が連なっています。現在、人類学では、私たちホモ・サピエンスは約20万年前にアフリカで誕生し、約6万年前から地球の各地に拡散していったと考えられています。その過程で、塩基の配列に様々な変異が生じ、遺伝的な多様性が生じました。その変異の型がハプロタイプです。ミトコンドリアDNAは母から子へと受け継がれる遺伝子なので、そのハプロタイプをもとに母系を追跡することができます。

青谷上寺地遺跡出土人骨にみるハプログループ

祖先が共通なハプロタイプを併せてもつ人の集団をハプログループと呼びます。同じハプログループに属する人たちは数万年遡ると共通の母親にたどり着きます。N9b や D4 といったアルファベットと数字の組み合わせでそれぞれのグループを表しますが、更に細かく分類するときは、N9b1 とか M7a1a などアルファベットと数字を追加していきます。縄文時代の日本列島に代表的なハプログループは N9b や M7a でしたが、弥生時代に渡来した人たちが多く持っていたのが、D4 と呼ばれるハプログループです。西北部九州の弥生時代の人骨には縄文人に共通する形質を備えた「縄文系弥生人」も知られています。どうやら弥生時代の集団には渡来系と縄文系の人々が入り交じっていたようです。

したがって、青谷上寺地遺跡出土人骨にも渡来系と縄文系のハプログループが存在するだろうと推測していました。しかし、その予想に反して、分析結果を得た 31 個の人骨のうち、30 個が渡来系弥生人に分類されるハプログループであること、さらに渡来系の中に多数のハプログループがあることが分かりました。このことは母系を異にする様々な人々が大陸から青谷上寺地遺跡にやって来ていたことを示唆しています。考古学による研究では、青谷上寺地遺跡は日本海を行き交う人たちが訪れる交易の拠点だったと考えています。ミトコンドリアDNAの解析から見えてきた多様な渡来系弥生人は、そうした考古学の所見を支持するものといえそうです。

青谷上寺地遺跡出土人骨の研究はスタートしたばかりです。今後、この共同研究では、母親方だけでなく父親方の遺伝子も受け継いでいる核DNAの分析を進める計画です。将来、青谷上寺地遺跡に暮らしていた人々のより詳しい情報を知ることができるかもしれません。

参考ホームページ

<http://www.tbz.or.jp/kamijichi/>

<https://www.pref.tottori.lg.jp/45937.htm>

<https://bunka.nii.ac.jp/heritages/detail/174085>

<https://blog.goo.ne.jp/himiko239ru/e/0f975bbd897dda997f92f045b1423d95>

http://inoues.net/ruins/yayoi_no.html

